ユリ☆チャンネル

柊こなた

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ユリ☆チャンネル

【Nコード】
N1933V

【作者名】
柊こなた

【あらすじ】
それは、突然だった。ある日、うちが眠りから目覚めると股のとこに女の子にはないものがあった。「Aチャンネル」のガールズラブな話になっています。この「ユリ☆チャンネル」は、にしすけさんが製作した「かが☆こな」を元に製作しました。作者のにしすけさんには、許諾を頂いております。

思い

生まれて初めてうちは、恋という感情を抱いた。その子は一年下のトオルという名前で、同学年でうちの友達のるんの幼馴染。
初めてトオルに会ったのは、まだ桜が満開に咲いていた４月の中ごろ、うちがるんの家に遊びに行っていた時に初めて会った。でも、まさか初めて会ったのにあんな羞恥を受けることになるとは……夢にも思っていなかった。けど、時が立つことにトオルとは仲良くなりいつしか、毎日のように話すようになった。そして、ある日突然気づいた。自分がトオルのことを好きになっているという事に。いつもうちの頭の中ではその子の顔が浮かんでいた、授業を受けているときやお風呂に入っているとき、ご飯を食べているときなど何をしていてもいつもトオルのことを思ってしまう。そしていつしか、トオルに自分の思いを伝えたいという思いが芽生えたのだが、その思いはトオルに伝えらない。なぜなら、そこにたどり着くまでには絶対に乗り越えられないものすごい大きな壁があるのであった。それは、トオルもうちと同じ女の子だった。そう、うちは同性に恋してしまった。うちは、トオルの恋人にはなれない。うちのこの思いは永遠にトオルに伝えらないと思った。
「ユー子？」
「っ！？」
ふと我に戻り、トオルの顔を見る。
「どうしたん、トオル？」
「ユー子、大丈夫？　なんかいつもより元気ないから」
トオルが心配そうな顔をして言う。
「大丈夫やで、ちょっと考えごとをしてただけやから。心配しなくてもええで」
そう言うとトオルは、にこっと頬笑み
「なんか、悩み事があったらいつでも言ってね、相談にのるから」

と言った。

「ありがとな、トオル」

そう、うちが言うとトオルは何も言わずに笑ってるんのところに行った。

うちは、この思いをトオルに伝えたいと思っていた、でもこの思いは永遠にトオルに伝えらないと思った。その時、うちは思った。

「どうしてうちは女の子として、この世の生まれてきたんだろう。どうして男の子として、この世に生れてこなかったんだろう」

と思った。うちは、初めて自分のことが嫌いになった。そんなこと思っていたら、いつしかうちはこんな思いが芽生えた。

「男になってみたい」

という思いが芽生えた、この世に神様がいたらひょっこりとうちの目の前に現れてうちのこの思いを叶えてくれないかなと思った。でもうちはこの時、まさかこの永遠に叶う事が出来ない思いがあとであんな結果で表れるなんてまったく思っていなかった。

思い（後書き）

こんにちは、柊こなた（坂田銀時）です。次回の投稿は、今週の金曜日になります。

突然

何にも変わらないある日の朝、いつもの時間に起きる。けど、この日の朝は違う。

「なんじゃこりゃぁーーーーー！！」

うちは、眠りから目が覚めて数秒で部屋中に響く奇声を上げた。

「どうしたのユー子、そんな大声出して」

お母さんが、うちの部屋のドアの前に来てうちに聞いてくる。

「い、いやなんでもないってお母さん」

「本当に？　ちょっと入るわよ」

と言うとお母さんは、ドアノブに手をかけドアを開けようとする。

「本当になにもないから。お母さん、さっきお父さんが呼んでいたで」

うちは、とっさに嘘をつく。

「本当？　一体何かしら」

と言ってお母さんは、ドアの所からはな一階に降りていった。

「……危なかったわ」

なんとか、お母さんを追い払う事に成功した。まさか、こんなことになっている自分の姿を見せてはいけなかった。

うちは、自分の目を疑った。今、自分の股のところが膨らんでいたのであった。

「ま、まさかな。これは夢や。もう一回寝たら覚めるわ」

自分に暗示をかけながら、もう一回ベットに横になり寝た。だが、再び起きても股のところは膨らんでいる。

「う、うそやろう……ぁ！　きっとなにかが入っていて膨らんでいるんや」

そう思いながらうちは、パジャマと下着を一緒にごそっと降ろしてみた。

「……あかん、こんなことが」

うちは泡を吹いて気絶しそうだった。股のところには本来なら女の子には絶対に存在しないものが、最初からあったような存在感を出しながらちょこんとついていた。

「どうして、そんなものが……」

もう、うちは言葉を失った。今、自分の身に起きていることに。突然、眠りから目覚めたら自分の股のところに本来なら女の子には絶対につかないものがそこに着いているのだ。未だに状況が飲み込めずに、口を大きくポカンと開けて立っていると

「ユー子、そろそろご飯食べないと学校に遅刻するわよ」

とお母さんが言ってきた。その声のおかげで、うちは正気に戻った。

「うん、分かった。すぐ行く」

降ろした下着を再び履き、パジャマを脱ぎ制服に着替えて鞄を持って一階に降りていき、朝食を食べて学校に行ったのであった。

突然（後書き）

こんにちは、柊こなた（坂田銀時）です。次回の投稿は、来週の金曜日になります。

相談

朝に起きた怪奇現象のことを考えながら、うちは学校へ向かった。
そして、自分の教室の前につくと
「ぁ！　ユー子」
教室の前には頭のてっぺんがウニのようにとがっていて、背が高
校生とは思えないほど低い女子が私の名前を呼ぶ。
「おはよう、ってあれ？」
うちは、周りをキョロキョロと見渡した。
「どうしたの、ユー子？」
「トオル、るんと一緒じゃないの？」
いつもトオルと一緒いるはずのるんが、今日はいなかった。
「さっき、先生に呼ばれて職員室に行ったよ」
「そうなんや」
うちはほっとして胸をなでおろした、もし、るんがいたらこんな
ことをトオルには言えなかった。
「ユー子は、ナギと一緒じゃないの？」
「うん、今日ナギは風邪で休んどる」
「ナギが風邪、珍しいね」
「昨日から体調が、悪かったらしいで……なぁトオル、ちょっと相
談したいことがあるんやけど」
トオルに、相談の話を持ちかかる。
「ユー子、なんかあったの？」
「う、うんちょっとな。ここじゃちょっと、話づらいからどっか別
の場所に行こう」
そう言うとうちは、トオルの手を握って人の気配が一切ない廊下
にやって来た。
「それで、相談ってなに？」

とおるが、うちの顔を見ながら聞いてくる。
「え～とな、その……」
うちは悩んだ、今ここでトオルに自分の股の所に本来、女の子にはないものがあるって言ったら完全に嫌われるしそれに言うのが恥ずかしい。
「ユー子？」
目を大きく開かしてトオルが、うちの顔を見つめていた。
「どうしたのユー子？　なんかいつもと、なんか違うね。なんかあったの？」
「実はな、その……」
うちは顔をリンゴのように真っ赤にして、聞こえそうで聞こえそうじゃない声で言った。
「生えちゃったんや」
「なにが？」
「ここに」
と言うとうちは、迷いながら股のところを指をさした。
「な！……」
トオルは、口をポッカンと開けてただ呆然と立っていた。誰だってこんなことを突然、聞かされたらこんな状態になるだろうと思っていた。
「トオル？　大丈夫」
「それは、いつ生えていたの？」
「朝起きたら、生えていたの」
「信じられない、まさか、そんなことが……」
「本当や、信じてや」
真っ赤になっている顔を横に向けて、トオルに言った。
「ユー子が私に嘘つくなんてないしね」
どうやら、信じてくれたらしい。
「んでも、どうしてそんなものが急に」
「知らないわよ、うちが一番知りたいわよ。変なものも食べてない

し」
「どうしてだろう」
トオルは、冷静でいた。もしこれがるんだったら、卒倒で泡を吹いて気絶しているだろう。
「ね、ユー子」
「なに？」
「ちょっと、見てもいい？」
「え！　それは……」
意外なことを言ってきた。まさか、こんなことには興味なそうなトオルの口からそんなことを言うなんて思ってもいなかった。
「ダメ？」
「……別にうちは良いけど、本当にええの？」
そう、うちが聞くとトオルは何も言わずに首を縦に振った。
「じゃ、いくで」
と言うと私は、スカートの中に手を入れて下着を太もも辺りまで降ろして、少しだけスカートの裾をたくし上げた。
「……」
トオルは、私の女性器の数センチ上のことにある本来、女の子にはない突起物を見てまた口をポッカンと開けて呆然とそれを見ていた。
「……本当に、生えてるよ」
「だからさっき、言ったやんか」
「本当に身体とつながっているね。感触とかある？」
「うん、一応今朝、確かめてみたやんけど、もう完全にうちの身体の一部になってるんや」
「へぇ〜」
とトオルは、にやにやと笑いながら言った。
「なんや？　トオル」
「ユー子、これに触ったんだ」
「何言ってるん、ただの状況確認しただや。なに、変なこと考えて

るんや」
　と顔を太陽のように真っ赤にさせて言った。
「絶対、なんか考えたでしょ」
「そんなことを考えている暇なんてないわ……って、いつまで見てるつもりなん。もう十分に分かったやろう。もう、おしまいや」
　うちはそう言うと、スカートを元に戻して太ももの辺りまで降ろしていた下着を再び元の場所に戻した。

相談（後書き）

こんにちは、柊こなた（坂田銀時）です。次回の投稿は、来週の金曜日になります。

対策

うちが、スカートを元通りに直しているとトオルは、まじめな顔をして考え込んでいた。
「う～ん、ねえユー子」
「どうしたん、トオル？」
「病院とか行った？」
そうトオルが聞いてくと、うちは首を横に振り
「行ってない。さすがに抵抗くらいはあるし、それになんて説明したらいいか分からへんし」
「まぁ、たしかに朝起きたら生えていましたって言ってもなかなか信じてはもらえないしね」
「せやろう、本当にどうしよう……」
と、うちがうつむいて言うとトオルが
「ねぇ、ユー子」
「なに？」
「私と一発やってみる？」
と、真面目な顔をして言ってきた。
「っな！　トオル、何言ってるんの！？」
うちは、廊下中に響く声で言った。突然、そんなことを言われたら誰だってこんな反応をするはずだ。
「あのね、ユー子。同人の世界だったら、行為をするために生えやしてそして行為が終わったら自然消滅っていうのがだいたいの主流になっているね、よく百合もんのやつにはよくあるんだよ」
トオルは、同人誌で描かれているこういうシチュエーション時の対処法を言ったのであった。そして、うちは初めてトオルが同人誌を読んでいることを知った。
「案外、私たちも一発やってみたら、うまくいくかもしれないよ」
と、トオルはくすくすと笑いながら言った。

「あのなぁトオル、同人の世界と今ここで起きているこの現実を一緒にせんといて。そんなに、うまくいくわけないやろう」
と、うちは呆れた顔をしてこなたに言った。
「まぁ冗談はこれくらいにおいて、本当にどうしようかね？」
と、トオルが言った時、後ろから見知った声が聞こえた。
「あ！　ユー子ちゃんとトオル、こんなところでなにやってるの？」
職員室にいるはずのるんが、突然何の前触れもなく現れたのであった。
「るん！　どうしてここにいるの？」
うちは、動揺した顔をして言った。
「ぇ？　さっき先生に呼ばれて、職員室に行っていたの」
「へぇ、そうなんや」
「それで、ユー子ちゃんとトオルは何していたの？」
るんが、うちトオルの顔を見て聞いてきた。
「えぇっと、ちょっと一緒にトイレに行っていたんや、なぁトオル」
「うん、ユー子が一人でトイレに行くのが怖いって言って、一緒に行ったの」
と、トオルは私の嘘に合わせてくれたのだが、そんなことまで言わなくてもいいのにと思った。
「へぇそうなんだ、そろそろチャイムが鳴るから教室に戻ろう」
るんは、にこにこと笑いながら言った。
「せやな、そろそろ行こうか。トオル」
「そうだね、そろそろ戻ろうか」
うちら三人は、話しながら自分たちの教室へと戻ったのであった。
結局は、何の解決策が出ないままこなたとの話し合いは終わったのであった。

対策（後書き）

こんにちは、柊こなた（坂田銀時）です。次回の投稿は、来週の金曜日になります。

授業

結局、解決策も見つからないままうちは教室に戻ったのであった。
そして、朝のホームルームが終わり、一時限目の数学の授業が始まった。うちは、股の間に違和感を感じながら授業を受けた。
「ユー子ちゃん？」
隣の席のるんがうちの肩をチョンと叩いて呼んだからうちは横を向いた。
「ん？　どうしたん」
「さっきから、足をもぞもぞと動かしているけど大丈夫？」
「大丈夫や、心配せんでいいから」
「そう、だったらいいけど」
「心配掛けて、悪いな」
と、苦笑いをしながら言い、前を向いた。
「はぁ」
うちは溜息をついた。うちはなんとかしてこの股の間にある違和感を消すために太ももをこすり合わせて足をもぞもぞと動かしたが、違和感は消えなかった。それどころか、周りからは変な目で見られているような感じがした。
「ユー子さん」
「あ、はい！」
突然、先生に呼ばれたからうちは反射的に返事をした。
「この、問題わかりますか？」
と、先生は黒板に書いていた数式を指差して言った。
「……分かりません」
「そうか、それじゃあ、るんさんわかりますか？」
「はい」
「それじゃ、前に出て答えてください」
と、先生が言うとるんは席を立って黒板のところに行き答えの数

式を書いて自分の席に戻ってきた。
「正解です、ここは次のテストに出すからちゃんと覚えておくように」
今のうちには、覚えることができなかった。なんとかして、この違和感を消すために必死に考えていた。頭を抱えてもシャーペンで頬をつついても結局は、なにも思いつかなかった。
「ユー子ちゃん」
また、横から声をかけられたから後ろを振り向いた。
「ユー子ちゃん、本当に大丈夫？　さっきの問題もユー子ちゃんだったら解ける問題だったのに」
「大丈夫や、ちょっと考えごとをしていただけやで」
と、手を振りながら言った。さすがに友人といってもこの前代未聞のことを言えるはずがなかった周りにも人もいるしそれに言うのが、恥ずかしかった。
「だったらいいけど、体調が悪かったらいつでも言ってね」
「うん、ありがとう」
と、言ってうちは前を向いた。うちは、周りをきょろきょろと見渡した、気分の問題かは分からないが、周りにいる女子が異性に見えて男子が同性にみえてしまう。あれが生えてから、うちの目に見えている世界が崩壊しているような気がした。そんなことを考えているといると一時限目の授業の終わりのチャイムが鳴った。

授業（後書き）

こんにちは、柊こなた（坂田銀時）です。次回の投稿は、来週の金曜日になります。

トイレ

一時限目の終わりを知らせるチャイムが鳴った後、うちはあそこにあんなものが生えてもう一つの疑問があったからそれを試しに行ったのであった。私が疑問に思っていたことは、トイレだった。はたしていつものところから出るのかそれとも新しく生えてきた方から出るかうちは疑問に思っていた。
「どっちの方から出るんやろう……？」
と、小声で呟きながらうちは女子トイレに向った。うちがトイレへと歩いていたら後ろからトオルが走ってきて
「ユー子！」
と、言ってきた。
「わ！　びっくりした。驚かさんといてや」
「ユー子、どこに行くの？」
「ちょっとトイレに……」
と、うちがそう言った瞬間トオルはニヤッと笑った。
「ユー子、もしかしてどっちから出るか確かめに行くんでしょう」
「な！」
うちは、驚いた。まさか、私うちが目的地を言っただけでこなたはその目的を当ててしまったのであった。
「あ〜、その反応からして正解だな。ま、誰だった確かめたくはなるよ」
「せ、せやろう。だから、今からトイレに行って確かめるんや。……今後のことをあるし」
「へぇ、そうなんだ。それなら早く行こうか、私もトイレに行く途中だったし」
と、言ってトオルは私の手を握って走って行ったのであった。
そして、うちとトオルは女子トイレに着いたのであった。そして女子トイレのドアを開けてトオルは個室に入ったのであった、トオ

ルが入ったのを確認してからうちはそわそわとしながら個室に入ったのであった。
　個室の中に入ってから、うちはなにもせずに立っていた。
「……大丈夫かな……」
　と、少し怖気づいていた、でもうちは目前に迫ったこの問題に全力を注がなければ解決しないと思いうちはスカートのチャックを下げて、下着と一緒に下ろした。
「……」
　当然のように、うちのあそこには朝突然と生えていたものがちょこんと生えていた。目を何度もこすってもこれは現実で起こっていることなのだ。うちが小さい頃に、お父さんと一緒にお風呂に入っていた頃を除いてうちはまだ実物を見たことがなかった。そしてうちは、何を考えていたかは分からないが本日二度目となるそれに触ったのであった。
「うわ……」
　先の方をちょんと触ってみると予想以上にぷにぷにとしていた、これがある条件を満たせばこれの何倍の大きさになってそして硬くなるっていう話を保健の授業で聞いたことがあるけどと思っていた時隣の個室から
「ユー子、まだ～？」
　不意にトオルの声が聞こえてきた。
「もうちょっと、待ってや」
「トイレの前で、待ってるから」
　と、トイレのドアが開く音がして、トオルがすたすたと廊下の方へと歩いて行った。
「分かった」
　もうこれ以上もたもた、問題は進展しないと判断して、うちは洋式の便器にしゃがみ込んで下半身に思いっきり力を込めた瞬間、水が流れる音がした。
「うっわ、出てきた」

予想はしていたが、まさか本当に出てくるとは思わなかった。どうやら老廃物を排出する機能としては男性器の方しか機能しておらず、いつもの方からは出てくる気配がなかったどうやら完全に機能は失われているようだ。ものすごく、へんな感じがした。そして、老廃物の排水は終わりうちが便器から立ち上がりスカートを戻した。

。スカートを戻した後、一旦深呼吸をしてから個室から出た。

「終わった？」

トオルが、心配そうな顔をして言う。

「うん」

と、言った瞬間3時限目の初めを知らせるチャイムが鳴った。

「やばい、授業に遅れる」

と、言いながらトオルは走ってトイレから出ていった。そのあとに続くようにうちもトイレから出て教室に戻った。

トイレ（後書き）

こんにちは、柊こなた（坂田銀時）です。次回の投稿は、来週の金曜日になります。

体育

三時限目の授業が終わり、うちは体育館の脇にある女子更衣室で体操服に着替えていた。まあ、今のうちの性別じゃ女子更衣室に入ることが必然だが、なんだが複雑な感じがする……体操服は、制服と一緒で男子のものやつから上はありふれた白の体操服で下は、現在では貴重品となっている紺色のブルマ。もう、この学校以外でブルマ使っている学校なんてないだろう。
「よし、着替え終わりと」
ちなみに、うちの身体から生えてきた例のものはもっこりとしないように股の下にきっちりと格納した。
「ねえ、ユー子ちゃん」
「どうしたん、るん？」
と、るんの呼びかけに応えるとるんが後ろからギュッとうちに抱きつく。
「るん……？」
背中には柔らかい二つの膨らみが、るんが身体を動かすたびにその感触が伝わってくる。隔てるものが薄い生地でできた体操服二枚分、あとるんがつけているいるであろうブラのみであろう。それが、俺の背中にやや大きめのサイズの胸が当たっている。
「……」
うちは、顔を真っ赤に染めてさらに心臓がドクドクと騒がしく鳴っている。
「まさか、これって……」
うちは、脳をフル駆動させて考えた。確かこういう時のよくある展開は、男性のものを備えてしまった女の子は、性欲が異性ではなく同性に向くようになる。つまり、女の身体でありながら女の子の身体に興奮するようになるという事だ。つまり
「るん、ちょっと離れて」

「ん？　どうしたのユー子ちゃん」
「ええから、今すぐに離れてや」
うちの事情を知らない彼女としては、これは軽い遊びのつもりでやっているんだろうが今のうちには、この遊びは禁じた遊びなのだ。
背中にくっついていたるんを強引に引き剥がし両足を揃えて折り、膝を抱えるような格好でその場にしゃがみこんだ。
「どうしたの、お腹でも痛いの？」
「……」
「ユー子ちゃん、大丈夫？」
るんがうちの前に来た。あろうことが着替えの真っ最中の彼女は上下揃って下着のみという格好でいた。しかも前屈みの状態で、ピンク色のブラからちらりと覗くふっくらと膨らんだ胸が形成する谷間がうちの目の前に見えた。全身が溶けそうなくらい熱い、頭がふらつき意識が保てない。そして
「……ダラダラ……」
うちの鼻から真っ赤な液体が大量に流れてきた。そしてうちは、気を失い鼻血をダラダラと流してその場に倒れた。

体育（後書き）

こんにちは、柊こなた（坂田銀時）です。次回の投稿は、来週の金曜日になります。

目覚め

うちは、更衣室で鼻血を吹いて気絶をした。
「……ここは？」
ゆっくり閉じていたまぶたを開けるとうちは体操着のままベットの上で寝かされていた。どうやら、別の部屋に運ばれたらしい。
「意識が戻ったみたいですね」
うちの顔を覗き込んできたのは、見覚えがある養護の先生だった。養護の先生がいるってということは、ここは保健室だろう。
「先生、うちどうして保健室に？」
「体育の着替えの時に、鼻血を吹いてそのままばたりと倒れたそうですよ」
先生の話を聞くと、どうやら鼻血を床一面に吹いて気絶して倒れたらしい。今は鼻血は止まっていて、しばらく安静にしていればいいとのことらしい。
「それにしても、一体どうしたんですか？　更衣室を血の海に変える量だったそうですが」
と、書類に書きながら、聞いてきた。
「……えっと、どうしてやろう……うちにもさっぱり」
と、言ってうちは、仰向けになって天井を見た。
「身体の具合どう？　頭がくらくらするとか、だるいとかない？」
先生が、俺の体の調子を聞いてきた。
「いえ、もう大丈夫です」
「そうですか、でも念のためにもうしばらくここで横になっていてくださいね」
「分かりました」
「ちょっと先生、職員室に行かないといけないから。すぐに戻るのでちょっとだけ待っていてくださいね？」
そう言い残し、先生は椅子から立ち上がりさっきまで書いていた

書類を持って保健室から出ていった。

目覚め（後書き）

こんにちは、柊こなた（坂田銀時）です。次回の投稿は、来週の金曜日になります。

保健室「上」

保健室から先生が出ていった後、うちは真っ先に自分の股間をチェックした。股間を見てみるとあれはいつの間にか元のサイズに戻っていた。
「……はぁ、よかった」
と、小声で呟いてうちは時計を見た。時計を見ると、午後1時を少し過ぎていた。４時限目の授業が終わってお昼休みになっている時間だった。
「……」
うちは考えた、どうして鼻血を吹いて倒れたか。そして考えた結果ある仮説が出来た、今のうちの体はこの特殊な器官を備えている間は、男の子と同等だという事だ。女の子の着替えを覗き見るというのは、男としてはたまらんシチュエーションなんだろうなと思う。つまり、今うちは、女でありながら他の女の子の身体に興奮してしまう身体になってきているんだろうと思った。
「はぁ……もう一度寝ようかな」
と、溜息をついて一度寝ようとした時、保健室のドアが開き
「ユー子、大丈夫？」
と、聞こえてきた。
「トオルか？」
トオルが保健室に入ってきて、うちが寝ているベットの近くにあった椅子を持ってきてベットのところに置いて椅子に座った。
「ユー子、大丈夫？　さっきるんちゃんから聞いたんだけど、着替えの時に鼻血吹いて倒れたんだって？　大丈夫なの？」
「うん、もう大丈夫やでとおる」
「そう。けど、どうしたの？　今日、そんなに体調悪かった？」
鼻血を吹いて倒れた原因は分かっているが、それをトオルに言ったら今まで築いてきた好感度が大幅に下がってしまうと思ったから

うちは
「さぁ、どうしてやろうね……はっはっは」
ここは適当に、誤魔化しておくしかない。
「話を聞いた時は何事かと思ったけど、元気そうで何よりだよ」
そう言ってトオルは、自分が座っていた椅子から立って私がいるベットの端に腰をおろした。トオルの安堵に満ちた横顔を見ていると本気で私の事を心配してくれたのが良く分かった。
「ねぇ、トオル？」
「……ん？　どうしたのユー子？」
「もしも治らなかったら、どうしたらええんやろう？　そもそも、これが生えてきた理由なんてどこにも無いんやで、ある日突然やで。今更だけど、それがちょっと怖いんや……次は、どんな異変が起きるんだろうって思うとうち……」
こんな状態で女として生きていけない、それはさっきの一件で身を投じて思い知った。今後の事を考えると不安な要素なんて探せばいくらでも見つかるんだろう。
「そう不安にならなくてもいいよ、ユー子。そのうち対処法も見つかるはずだからさ」
トオルの返答は、私の弱音を気を遣わせてしまったのか妙に明いものだった。
「……うん、それもそうやな」
「それにほら、もしさユー子がずっとこのままだったら私がずっとそばにいるから」
「っトオル……」
そう私が言うと、トオルが正面からうちに抱きついてきた。

保健室「上」（後書き）

こんにちは、柊こなた（坂田銀時）です。次回の投稿は、来週の金曜日になります。

保健室「下」

今うちは、ベットの上でとおるに抱き着かれていて、馬乗りになるような格好だった。トオルのしなやかな細い腕、ほっそりとした太腿がうちの体にぎゅうぎゅうと押しつけられる。るんとは違って、トオルの胸はぺったんこだった。

「……」

「……」

お互いの吐息が感じられるくらいに迫った顔、抱き合ったまま二人は固まっていた。

「……ト、トオル？」

今、私のあれがいつもの大きさより倍増してトオルの魅惑の渓谷に押しつける格好だった。

「なあに、ユー子？」

「トオル、これってどういう事なん？」

「いやだった、ユー子」

そう言うとトオルは普段では絶対に見せない表情の消え失せた顔だった。なにを考えていか全く分からない、見たことのない怖いくらいの無表情だった。

「い、嫌じゃないけど。ただ……」

「ただ？」

「その……あの……」

「ユー子」

嫌じゃないけど、どう言ったらいいか分からない。

そう言うとトオルは、ギュッと強くうちを抱きしめた。

「トオル？」

「……」

うちの問いかけには何も答えず。ただうちの体を抱きしめていた。

「ユー子が、倒れたって聞いた時本当に心配したんだよ。もし、ユ

I子の身に何かあったら私、どうしたらいいか」
トオルが目から涙をこぼしそうな顔をして言う。
「トオル」
と、泣いているトオルの頭をなでる。そんなにもうちのことを心配してくれていたんだと思った。
それからずっとうちとトオルは抱き合い、しばらく経ってからトオルがゆっくりとうちの身体を離してベットから降りた。
「じゃそろそろ行くね。次の授業、移動教室だから」
そう言い残すと、トオルは振り向くことなく保健室から出ていった。
うちはたった今、初めてトオルのいつもとは違う「女の顔」を見た。いつものトオルだったら絶対に見えない、異性にしか見せない女の子らしい表情だった、もしこれが生えなければ一生見ることができないトオルの素顔だった。

保健室「下」（後書き）

こんにちは、柊こなた（坂田銀時）です。次回の投稿は、来週の金曜日になります。

帰宅

　あれから時が流れ放課後、うちは放課後になるまで仮病を使って保健室に居座っていた。授業を受ける気がなかったからである。そして放課後、さあ家に帰ろうと玄関に行き靴を履こうとした時、後ろから

「ユー子、一緒に帰ろう」

　と、トオルが声をかけてきた。

「うん、一緒に帰ろう……そういやトオル、今日はるんとは一緒じゃないの？」

　うちは周りをきょろきょろと見渡して言う。いつもトオルとるんは一緒に帰っているのに、今日はるんの姿がなかった。

「るんちゃんなら、お友達の家にお泊りするらしいよ。なんか、勉強を教えてもらうんだって」

　るんが勉強を教えてもらうなんて珍しいことがあるんやな。

「へぇ、そうなんや」

「うん。……ねえ、ユー子」

　トオルが普段とは違う空気を漂わせながら言う。

「なに？　トオル」

「ねえ、ユー子の家に泊まっていい？」

「別にええけど、でもなんで？」

　そうトオルに聞いてみると、トオルは顔を下に向け赤く染めて

「その、ユー子のことが心配だから」

　と、言った。そんなにもうちのことを心配してくれるなんて涙が出そうだった。

「どうしたのユー子？　大丈夫？」

「大丈夫やで。ありがとうな、トオル。うち、めっちゃ嬉しいわ」

「そう。それじゃ私、先に帰って準備してくる」

「うん、分かった」

うちがそう言うとトオルは、走って家に帰って行った。

帰宅（後書き）

こんにちは、柊こなた（坂田銀時）です。次回の投稿は、未定です。

自宅

今、うちとトオルは同じ部屋にいて、そしてなぜかうちが苦手な怖いＤＶＤを一緒に見ていた。なぜこういうことになっているのかというと、明日は学校が休みのためトオルがうちの家に泊まろうという提案がきっかけでこんな状態なっている。
「ユー子」
泣きそうになっているうちの名前を呼ぶ。
「なに？　トオル」
「大丈夫？　泣いてない？」
「大丈夫やで、ちょっと目にゴミが入っただけやから」
「そう。ねえ、今日ユー子の親御さんはいないの？　家に入ってきた時、誰もいなかったけど」
「うん。今日私以外の人みんな出かけているんや」
今日は珍しく、お母さんは同窓会に出席してお父さんは残業があるために二人とも今日は家に戻らないらしい。
「……つまり、今日はユー子と私だけってこと」
「そうやけど。なにか？」
と、うちは机の上に置いてあったお菓子を食べながら言う。
「なんでもない。それよりユー子、そろそろ夕飯の準備しよう。もうこんな時間だし」
トオルは時計を指さして言う。トオルに言われて時計を見てみると時計は７のところを指していた。
「せやな。うちもお腹減ったし。行こうか」
そう、うちが言うと、うちととおるは一緒に一階に降りて行った。

自宅（後書き）

こんにちは、柊こなた（坂田銀時）です。次回の投稿は、来週の金曜日になります。

入浴

今日の晩御飯は、トオルと協力してうちの得意料理であるカレーをつくった。
「ユー子、これ結構おいしいね」
「うん。カレーはうちの得意料理やからね……」
うちは食べながら思った。トオルはうちの事をどう思っているんだろうと。性別が同性なだけに特になんともただの友人としか思っていない可能性が高い。でも、保健室でのあのトオルが見せた「女の子」とした表情はなんだったんだろうか。異性として、うちの体に男の子のものがついていることに恥ずかしがったか。でも、そんな気はしなかった。でも、その確証もない。
「もうこんな時間か……トオル、先にシャワー浴びてくるね」
「うん、分かった」
トオルは、カレーを食べながら言った。うちはその場から逃げるようにバスルームに向った。

「今日のところはシャワーで済ませておこう」
というのが、男のうちと女のうちの意見だった。スカートを降ろして洗濯機の端っこに引っかけた。そして、下着も足から抜き取る。下半身が裸になったうちは、洗面所の鏡に自分の姿を映した。
「……」
相変わらずにあれは、うちの股のところに堂々と鎮座していた。
うちは、いつも通りにシャワーを浴びているときふと妙な違和感に囚われた。肩をぐるぐると回したり、腕を太もも、手のひらでばしばしと叩いてみると、いつもの弾力はなかった。
「あれ？　なんか……筋肉、硬くなってない？」
気のせいだ。身体の硬さなんて普段から気にも留めていない。
「……うちの胸、こんなサイズだったけ？」

今度は、自分の胸を揉んでみた。いつもと変わらない柔らかさ、手触りだった。そう簡単に大きさが変わるわけないか。でも

「……トオル、どうしよう……うち、もう……」

どんどん女の子から離れ行くうちの身体、そして心の中までもが……

入浴（後書き）

こんにちは、柊こなた（坂田銀時）です。次回の投稿は、来週の金曜日になります。

二人「上」

うちとトオルははは、ぎくしゃくした時間を過ごし間もなく日付けが変わろうとする頃
「そろそろ、電気消すよ？　トオル」
「わかった。おやすみなさい」
そうトオルが言った後、うちは電気を消した。
「なんか疲れたなぁ……朝から、色々とあり過ぎて」
「そうだね、結局ユー子のあれも解決しなかったし」
「……トオル」
「なに？」
「狭いから、もうちょっと離れてくれん？」
「いいんじゃん。もうこっちは場所ないし」
「やれやれ」
うちは、小声でつぶやいた。いつもなら、布団を床に敷いていたのにふと気がつくと今日は、一緒の布団で寝ることになっていた。
「……全然眠れない」
うちは今、性的な意味で極度の緊張に侵されていた。そして、その緊張に耐え切れずうちは、かばりと布団を跳ね除けて上体を起こした。
「どうしたのユー子？　寝れないの？」
「うん」
寝れない原因は、今うちの横にいる人のせいで寝れなかった。いろんな意味で
「……ねぇ、トオル」
「なぁに、ユー子？」
「私、このまま男の子になるかもしれん」
「なにいってるの、ユー子？」
暗い中、トオルが一体なにを言っているんだという目をしてこち

らと見つめている。そして、うちはシャワーを浴びている時のことを話した。
「あのな、さっきシャワーを浴びていた時自分の体を触ってみたんやけど、以前のうちとは違う体つきになったような気がするんや」
「……体つきが？　どんな風に違うの？」
「どう言ったら分からないけど、なんか男の子っぽくなった感じかな？」
そう言うとうちは、風呂場で感じたことをそのままトオルに説明した。筋肉のことや胸の事を説目した。そして、説明していくとうちは思った。もしかたら、あれが生えてきたのは変化の前ぶれだったかも知れない。下半身や頭の中を中心に、これから身体全体が男の子に近づいていくのではないのかと思った。
「と、言う訳なんや。トオル」
うちが説明し終えると、横になっていたトオルがうちと同じように身体を起こした。ベットの上で座り込む格好で二人揃って座っていた。
「……さ、触ってもいいかな？」
そう言うとトオルは、うちの返事を待たずに右手を伸ばして来た。そして、うちの肩から腕までをゆっくりと擦っていく。
「どうかな、トオル？」
「……どうなんだろう？」
今度は、太腿が触られる。外側と内側の両方、ゆっくりとなでられて平手でやんわりとやさしく叩かれる。
「いまいち分からないけど、もし本当に変わったらえらいこっちゃだよね」
「本当、えらいこっちゃやで……トオル、あとここも小さくなっているような気がするんやけど」
そう言うとうちは、自分の胸を指でさした。
「そ、そうなんだ」
トオルがそう言うと、恐る恐るといった様子で両手を伸ばしてさ

っきうちが指摘した場所にそっと触れた。小さな、手のひらがパジャマ越しに膨らみを揉み解していく。

「……」

トオルが胸を触っている間、うちは顔を真っ赤に染めていた。なんだろう、この気持ちはただの検査なのに身体を中を撫でまわされている間、変なところばかりに目が行ってしまう。外からカーテン越しに月の光が、暗闇の中で白く浮かび上がらせる。剥き出しになった肩、白い太腿そして僅かに分かるささやかな膨らみ、そんな光景が少しずつ私の理性を奪っていく、そしてうちは胸を触るのに夢中になっていたトオルを強引に抱き寄せて、唇を重ねた。

二人「上」（後書き）

こんにちは、柊こなた（坂田銀時）です。次回は、一部過激な描写がございます。次回の投稿は、来週の金曜日になります。

PDF小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1933v/

ユリ☆チャンネル

2011年10月28日17時02分発行